

支部見聞録 (北陸支部)

From 福井



# 技術と品質を誇る 日本一の眼鏡の町 鯖江

福井市に隣接する鯖江市。一見何の変哲もないように見える静かなこの町が、日本の眼鏡フレーム生産の95%を占めている。日本が世界に誇る眼鏡産地、鯖江。その歴史と今を訪ねよう。



この地で生産される眼鏡フレームは、高い品質と技術を世界に誇っている

## 愛郷心から始まった眼鏡づくり

福井から鯖江に向かう北陸本線の列車から、あるいは北陸自動車道を走る車から、文殊山腹に掲げられている大きな看板が見えてくる。白地に赤くくっきりと、眼鏡のマークに「SABAE」の文字。古くは誠照寺の門前町として、江戸時代には城下町として栄えた鯖江は、現在は日本一の眼鏡産地の町として知られる存在だ。フレーム企画販売会社、フレーム製造メーカー、部品や工作機械の専門メーカー、金型製造業者やメッキなどの加工専門業者など、あらゆる眼鏡関連企業がこの地に集積して、地域全体がさながら眼鏡工場のような趣きを呈している。そのシェアは圧倒的で、今や日本で作られているメガネフレームの95%以上が、鯖江を中心とする福井産だ。



鯖江の町にはいたるところにメガネのシンボルやサインが  
取材・写真協力／社団法人福井県眼鏡協会

この地の眼鏡産業の歴史は、100年以上。文殊山麓の豪農に生まれた増永五左衛門が、冬は深い雪に閉ざされるこの地に農業以外の産業を興そうと、1905 (明治38) 年、大阪から眼鏡職人を招いたのが始まりだった。当時まだ眼鏡は一般的なものではなかった。しかし時は日露戦争の最中。ラジオもまだなく、戦況を知らせる新聞や雑誌を読むのに老眼鏡が売れ始めていた。加えてこれからの日本は教育が普及し、眼鏡の需要が高まるという読みも五左衛門にはあったようだ。新興の増永工場製眼鏡は苦戦したが、スタートからわずか6年で内国共産品博覧会の一等賞金牌に輝き、当時の先進地だった東京や大阪に肩を並べた。その技術の進歩を支えたのが、独特の帳場制度だといわれている。これは技術の優れた者を親方とし、それぞれが子飼いの職人を抱え仕事を請け負うもので、収入は出来高制。おのずから各帳場が切磋琢磨し、技術を追究して独自の眼鏡を考案する「ものづくり魂」とも言うべき土壌が根づいていった。

## 産地として成長、日本から世界へ

大正に入ると職人の独立開業も相次ぎ、1921 (大正10) 年には初の業界団体を結成、会員は20名。1925 (大正14) 年には金メッキ法を開発。昭和に入ると機械化への転換が進み、品質が向上して輸出が増え、県内の製造業者は72、工具800名へ成長、1931 (昭



眼鏡産業の祖といわれる  
増永五左衛門



かつての工場(帳場)での生産風景



めがねミュージアムには道具などを展示する博物館も

和6)年にはセルロイドフレームを製品化し、ますます眼鏡の生産は盛んになっていった。

第二次世界大戦の打撃は大きかったが、戦後の復興も早く、そしてダイナミックだった。1948(昭和23)年は福井大震災があった年だが、この頃から鯖江の神明、立待地区に眼鏡関連業者が集まり始めた。昭和30年代に入るとサングラスが一般化し、東京オリンピックが開催された1964(昭和39)年頃に生産のピークを迎える。産地として輸出に大いに力を入れ始めたのもこの頃。アメリカやヨーロッパの見本市に出展、産地の知名度を高め、昭和50年代半ばからはブランドライセンスによる生産が活発化。1984(昭和59)年には産地80年を期して福井県眼鏡協会の「めがねミュージアム(めがね会館)」を落成、チタンフレームのブームを経て1990(平成2)年にはついに眼鏡出荷額が1,000億円を突破している。

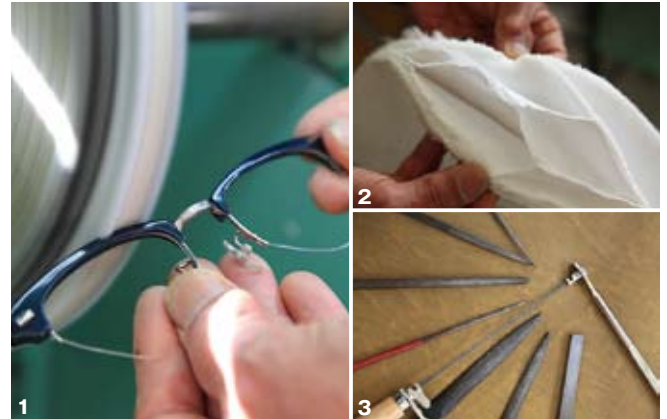
そして今——。海外と競合する多くの製造業と同様に、この地の眼鏡産業も荒波にもまれている。円高で輸出が頭打ちとなり、1993(平成5)年頃から価格破壊の波で低価格現象が拡大。中国製品の進出や低価格チェーン店の興隆で、2000(平成12)年頃からは企業数も出荷額も急激に右肩下がりとなった。

### 向かい風の中で、明日への取り組みを

21世紀に入り、グローバル化の流れのなか、原産地表示のルール制定から始めて鯖江を中心とする産地は未来への道を探ってきた。「その大きな柱が、2003年にスタートした産地統一ブランド、THE291(にいきゅういち=フクイ)です」と、社団法人 福井県眼鏡協会の坂野喜一専務理事はいう。THE291のブランドは一定の品質、技術、デザイン基準をクリアした商品に与えられるもので、全国にアンテナショップや取扱店網を整備、現在産地メーカー約20社が参加している。これまで鯖江を中心とした福井のメーカーが広く



めがねミュージアムのショップ。約40社が出品している



昔ながらの職人技。1. フレームの研磨作業 2. 研磨で使用するバフ。布やフェルトのような柔らかい素材でできている 3. 各部位の調整用のヤスリ

手がけてきたOEMが中国に移転するなか、今後は各社がいかに自社ブランドを展開するかが問われている。そこで品質が高く、技術・デザインに優れた福井製品のブランディングを確立し、マーケティングに不慣れな小さな企業も含めてバックアップすることがねらいだ。

「福井には100年の歴史に裏打ちされた技術と設備の集積があり、福井にしかできない製品を作る力があります。ワーカーの質も非常に高く層も厚く、一人ひとりがどうしたら品質の高い眼鏡が作れるかを考えている、これは他には決して真似のできないことです。大量生産では中国に分がありますが、小ロット多品種生産、素材や技術、デザインも含めて最先端の付加価値の高い製品を作ることにグローバル化のなかで福井が明日を拓く道があります。世界市場の中でニッチな高価格製品への需要をつかめば、展望も十分あると思いますね。若い人たちが頑張っていますから、まだまだこの地の眼鏡産業は元気ですよ」と、坂野氏。産学が連携しての新素材や加工技術の開発、眼鏡ならではの金属微細加工技術の他産業への応用、眼鏡産地鯖江の産業観光化への取り組みなども進めているという。

実は鯖江は眼鏡だけでなく、業務用の漆器製造でも日本一。同時に羽二重に始まる繊維産業の集積地でもあり、ほとんどの住民が何らかの形でこれらの産業に携わっている。北陸のものづくりの町で、向かい風の中にあってもその魂の息づかいが熱く、たくましい。

別冊 FROMはウェブサイトへ  
eふあみり もあわせてご覧ください!



<http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/>